



# やまね便り

第44号

## 心がほっこりする一冊

■ 『わすれられないおくりもの』 スーザン・バレイ/作・絵  
評論社  
— だれからも慕われていたアナグマの死。みんな、なにかしらアナグマとの思い出がありました。かけがえない友人を失った仲間たちの友情を描いた本。(むかわ図書館 司書)  
所蔵館 全館

■ 『食卓の情景』 池波正太郎/著  
— 食通で知られる池波正太郎のエッセイ。歯に衣着せぬ文章に食べ物だけでなく、時代や生活感、そういったものも味わうこともできる。なんだか懐かしいかおりのする本。(30代 男性)  
所蔵館 明・小

■ 『星守る犬』 村上たかし/著 双葉社  
— 幼い頃に両親を亡くし、最後に残った愛犬と死別してからは心を閉ざして生きてきた青年がニュースで知ったある男の孤独死とその犬とそこに至るまでの生き方に興味を感じ、調べていくうちに自分の生き方を見つめ直してゆく。星守る犬とは手の届かない夢を持つことを言う。(60代 女性)  
所蔵館 明・小

■ 『四十九日のレシピ』 伊吹有喜/著 ポプラ社  
— 夫と娘に「暮らしのレシピ」を残して亡くなった乙美。四十九日を迎えるまでの処方箋として…。じんわりと心暖まるストーリーです。(50代 女性)  
所蔵館 明・高

■ 『ノエル』 道尾秀介/著 新潮社 (30代 女性)  
■ 『峠うどん物語』(上・下) 重松清/著 講談社 (70代 女性)  
■ 『お母さんの声は金の鈴』 椋鳩十/著 あすなろ書房 (70代 女性)

## 心がほっこりする一本

■ 『かもめ食堂』  
— フィンランドの首都ヘルシンキを舞台にのんびりゆっくりとした交流を繰り返していきの様子を見るだけで幸せな気分になれる。(50代 女性)  
所蔵館 白

■ 『34丁目の奇跡』  
— サンタクロースって本当にいるのかな? だれもが子どもの頃に持つ疑問。夢を信じることをあらためて教えてくれるじんわり温かいストーリー。クリスマスの時期には必ず見たくなる1本です。(30代 女性)  
所蔵館 白

♪ 『キセキ』 Greeeen  
— 歌詞にゾクゾク!! こんなに愛されたら嬉しいだろうなあ? 一生に一度こんな恋愛してみたい。(20代 女性)  
所蔵館 長・武

所蔵館 明: 明野図書館 須: すたまさの図書館 高: たかね図書館 長: なさか図書館 金: 金田一春彦記念図書館 小: 小瀬沢図書館 白: ライブラリーはくしゅう 武: むかわ図書館

■ 『月の砂漠をさばさばと』 北村薫/著 お一なり由子/絵  
新潮社  
— さきちゃんとお母さんの日常がほほえましい。私も娘とこんな風にほほのした時間をすごしたくなります。お一なりさんのイラストもあつたかくて心がなごみます。(40代 女性)  
所蔵館 明・須・金

■ 『くすのきだんちはゆきのなか』 武鹿悦子/著 ひかりのくに  
— 黙って人のために尽くすことや、内緒で人の喜びをすることをという人として大切な行為を絵本を通して子どもたちに伝えられるように思いました。(30代 女性)  
所蔵館 小・白

■ 『つばさものがたり』 栗井脩介/著 小学館  
— 天使が見える男の子と自ら病気を抱えたパティシエールの物語。亡くなった父との約束を果たすため故郷に戻りケーキ屋を始めようとする小麦。夢に向かい、家族が一つになって頑張ろうとするのだが…。ファンタジーの要素を持ちながら、人生についても考えさせられ、読後はさわやかな温かさにも包まれる感動的なお話です。(30代 女性)  
所蔵館 武

■ 『しろくまカフェ』 ヒガアロハ/著 小学館  
— 動物たちと人間が、普通にしゃべっていいな～と思いました。パンダ君がすごくカワイイです。心がほっこりすると思います。全部で4冊あります。(10代 女性)  
所蔵館 白

■ 『うちの三姉妹』 松本ぶりつ/著 主婦の友社 (9歳 女性)  
■ 『音楽少年誕生物語』 畑中良輔/著 音楽乃友社 (70代 女性)

■ 『ちびまるこちゃん』  
— 学校と家と友達家族のかかわりがある。友達や家族との考えとかがすごい。みていると楽しくなっちゃう。(10代 女性)  
所蔵館 須・高・長・金

■ 『食堂かたつむり』  
— 主人公だけでなく、登場する人たち、そして観ているあなたの心も再生していく、心があたたかくなるストーリー。原作で読むのもおすすめです。(50代 女性)  
所蔵館 長・白

♪ 『風』 エレファントカシマシ  
— アルバムを通して激しい曲や穏やかな曲の中に、宮本浩次の温かい歌詞がちりばめられている。3曲目『友達がいるのさ』はその中でもイチ押し作品!(30代 男性)  
所蔵館 長

## Q & A

## レファレンス事例紹介!

? 白州町の「虎頭の舞」はどんなものですか? その写真や記述・DVDがあるか知りたい!  
▶ 江戸時代末からの歴史を持つ芸能。虎頭を先頭に、白州町の各集落を歩いてまわる祭り。  
◆◆参考文献◆◆  
① 『祭りには踊る』 矢崎定造/著  
② 『白州町誌』  
③ 『週間ほくとニュース』2007年10/27

? 古語で、動物の鳴き方をどのように表現しているのを知りたい!  
(鳥・雀・鶏など)  
▶ 室町時代～江戸時代  
\*鳥…「ここか」  
\*雀…「しうしう」「ちーちー」  
\*鶏…「とーんこー」  
◆◆参考文献◆◆  
① 『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』 山口仲美/編

? 「ヘボ」や「地蜂」について知りたい!  
▶ クロスズメバチのことを山梨の方言では「ヘボ」といい、別名を「地蜂」ともいう。山梨県北部や長野県などでは、昔からヘボの幼虫を食べる風習がある。  
◆◆参考文献◆◆  
① 『甲州方言』 深沢泉/著  
② 『虫を食べる文化誌』 梅谷献二/著  
③ 『甲斐路ふるさとの味』

編集後記 山梨県立図書館が甲府駅北口にリニューアルオープンし、ラジオでも図書館を特集した番組が放送されるなど、山梨県内で図書館の話題が増え、図書館への関心が高くなっています。この「やまね便り」も皆さんが図書館に興味を持ってもらえるきっかけになればと思います。(ま)

## 特集

長い冬だから…

ゆっくり読んでみたい  
長編・シリーズ物



あの人に会いたい

『ぼれぼれ田舎暮らしは  
おいしい楽しい』著者

松井美香さん

ほくとてくてく探訪  
～北杜市の伝説とその舞台～

おすすめ本とAV紹介

図書館の流儀 第1回「選書」

「心がほっこりする一冊・一本」

レファレンス事例紹介

長い冬だから…

# ゆっくり読んでみたい長編・シリーズ物紹介



『小暮写真館』 講談社  
宮部 みゆき/著

古い「小暮写真館」を購入し引越してきた花菱一家が、不動産会社の社員、幼馴染の歯科医の息子、同級生の娘、弁護士の子などとともに不思議な写真の謎を解いていく…。700ページを感じさせない展開で一気におすすめの一冊。



『罪と罰』 岩波書店ほか  
フョードル・ドストエフスキー/著

ロシアの文豪ドストエフスキーの代表作。貧乏な元学生ラスコーリニコフは、強欲な老婆を殺すことを計画するが、思いがけず善良な妹まで巻き添えにしてしまう…。この一冊で人生が変わってしまうほどの衝撃がある本。



『はてしない物語』 岩波書店  
ミヒヤエル・エンデ/作

主人公パスチアンが古本屋で手にしたのは『はてしない物語』という本。パスチアンがその物語を読みすすめると、現実の世界と物語の世界に変化が起き始めて…。本が好きな方や、壮大なファンタジーの世界を楽しみたい方にオススメの作品。



『守り人』シリーズ 偕成社  
上橋菜穂子/作

日本のファンタジーの傑作！児童文学でありながら、主人公バルサは30歳独身女性。しかも職業は短槍使いの用心棒。バルサは国王である父に命を狙われている第二皇子チャグムを助けるため一緒に旅することになり…。アニメやマンガにもなった、人気作品。



『源氏物語』 祥伝社  
林 望/著

源氏物語を平成に蘇らせようとする者が挑んだ本書は、古典の言い回しを気にすることなく小説を読むようにスラスラと楽しめる。源氏の時代の装丁をイメージした180度回転したと聞く“コデックス装”も魅力の一つ。



『1Q84』 新潮社  
村上春樹/著

村上春樹のベストセラー小説。舞台は1984年の東京。小説・舞台・イラストレーターであり暗殺者の青豆、予備校教師で小説家を志す天吾、その二人を調べる牛河。ある出来事をきっかけとして、1984年の世界は1Q84の世界へと姿を変えていく。



『ブンダブー』シリーズ ポプラ社  
くぼしまりお/作

古道具屋のおじさんが拾ってきたタンスの中にいたのはおしゃべりができる不思議な黒猫、その名もブンダブー。ホルムという港町を舞台に登場人物たちの心象を人間味あふれる温かい視線で描いた作品。



『アガサ・クリスティ探偵名作集』 岩波書店 アガサ・クリスティ/作

奇妙でちょっと不思議な事件の真相の謎解きに、名探偵ポワロが挑んでいく。シリーズなもののからこみカルで心温まるものまであり、子どもから大人まで推理の醍醐味を味わうことができるなかなか読みごたえのある本。

## 図書館の流儀

①新刊を中心に予約やリクエストのあった本、調査研究に応えられる専門的な本などを各館の特色と所蔵図書とのバランスを考え各分野偏りのないよう選定します。



図書館流通センター発行の週刊新刊全点案内

その週に発行されるほぼ全ての図書(約1500冊)を掲載。選書の参考にしていただけます。

## 司書のお仕事を紹介。第1回目は「選書」

北杜市図書館では「北杜市立図書館資料収集基準」に基づいて本の収集を行っています。図書館の本はどのようにして選ばれているのでしょうか？

②各館から選定された図書の中から購入する図書を決めるため月に2回選書会議を開き所蔵館を割り振ります。基本的に一般・児童対象の本は市全体で1冊、絵本なら1冊～2冊、人気のある本は予約数に応じて購入冊数を決定します。



※各図書館が特色ある資料を収集しています。  
明野(環境)、すたま(農業)、たかね(馬、山岳)、ながさか(ジェンダー)  
金田一(ことば)、小淵沢(鉄道)、はくしゅう(水)、むかわ(桜、米)



### ●「大草原の小さな家」が原点

幼い頃に観たTVドラマ『大草原の小さな家』が今の暮らしの原点です。大自然の中で衣食住のすべてを家族で作りあげていく生活。大人になったら、そんな風に暮らしていきたい！と小学校に入る前から夢みていました。

当時、東京で暮らしていましたが、蛇口をひねれば水が出る生活に、便利さよりも疑問を感じる子どもでした。水やガス、電気が止まったら、自分は生きていけるのだろうか？無人島でも生きていけるだけの知恵を身に付けたい…と、そんなことを真剣に考えている、ちよつと変わった子どもだったのです。

### ●八ヶ岳のふもとに住みたい！

山梨に住むきっかけは、芦安村での山村留学の仕事でした。学生の頃、八ヶ岳に登って以来、山小屋のアルバイトをするなど八ヶ岳が大好きになった私は、「八ヶ岳の麓に住む」ステップとして、この仕事に飛びつきました。その後、仕事を辞めた時に縁あって今の長坂の古民家に移り住むことができ、やっと自分が求めていた暮らしがスタートしました。

今住んでいる古民家は、かつて(※)堀内柳南さんの住んでいた家で、芥川龍之介も足を運んだと聞いています。柳南さんのように立派なことはできませんが、これからも大切に住もうと思っています。堀内柳南(1873-1932)…長坂町旧秋田村出身。北巨摩郡教育界の中心として活躍、大正12年に大八田の清光寺に芥川龍之介を講師に招き夏期大学を開くなど、生涯教育に取り組む。

### 松井美香さん



プロフィール  
1967年生まれ。東京農業大学短期大学栄養科卒業。30歳の時に夫と長坂町の古民家に移住。自家製大豆でみそやしょうゆ作りなどをしながら、楽しく暮らしている。ほれほれ工房主宰。2児の母。

### ●ほれほれ (スワビ語で「ゆっくり」の意味)

山梨に移住してすぐに、友人へ近況報告を兼ねて通信を書きはじめました。移住する前は八ヶ岳ジャーナルのような地域新聞の記者をしていたので、文章を書き続けたいという思いもあり、田舎での暮らしぶりや手作りのあれこれをイラスト入りで伝えてきました。

毎月、多い時には全国各地へ200通くらい送っていたこともあり、この通信がきっかけで『田舎暮らしの本』など田舎暮らし関連の雑誌でエッセイを書かせるもったり、手作りのことなどの連載をさせてもらったりしました。

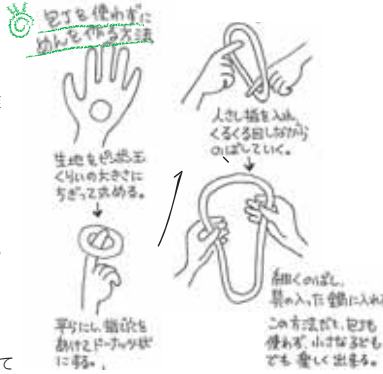
そして、その流れで「手作りのあれこれを一冊にまとめませんか？」と有り難い話が来て、本を出すことになったのです。コツコツと好きなことを続けていると、そのうち形になるものなんだなあ…とその時思いました。

### ●ほれほれと暮らし

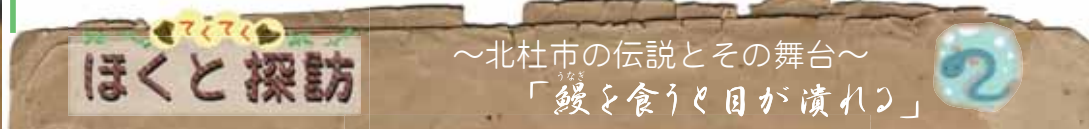
ここでの暮らしを始めた時は、好奇心満々で、あれもこれも…とやっていたが、暮らしていくうちに自分のできる範囲が見えてくると、無理せず楽しみながらやるのが一番！と思うようになってきました。だから手作りを楽しむ生活はしていますが、自給自足とは程遠いです。(笑)  
最近、出産と子育てで中断していた野

外教育と環境教育の仕事をはじめて再開し始めました。自然の中で子ども達(大人も)と過ごす仕事はこれからも続けていきたいので、自宅の庭をもっと手入れして、遊び場として開放したいなあ…とが考えています。

通信の方も子育てを理由にすっかりお休みにしてしまいましたが、そろそろ何か書き始めたいと思っています。これからも無理せず楽しみながら、ほれほれと暮らしていきたいです。



『ほれほれ田舎暮らしはおいしい楽しい』101ページ「ほうとうのつくり方」より



「鰻食うと目が潰れる」という伝説が残る武川町山高の幸燈神社(幸燈宮とも呼ばれている)に行ってきました。幸燈神社には稚日靈女尊という女神を祀っており、次のような伝説が残っています。鳥居の前には、今は水は入っていませんが実際に鰻を入れていた池が残っています。山高のお年寄りは今でも鰻を食べない方もいるのだそうです。



あるとき尊は敵との戦いの最中に落馬し、深い泥沼に落ちてしまい抜け出せずにいた。そこへ大鰻が現れ、尊の体を押し上げ無事に抜け出すことができ、戦いにも勝つことができたので、山高の氏は尊を助けた鰻を食べるものは目が潰れるといい鰻を食べないようになった。ところが今から100年以上前に村で一番の剛情者が他の村の者にそそのかされ鰻を食べたところ、目が見えなくなってしまうと噂されています。山高の人々はその後一切鰻を食べなくなったと言われています。山高の人々は幸燈神社の前に池を掘り、鰻はみなこの池へ放し大事に奉納したそうです。

参考資料  
『武川の文化財と民話・伝説・伝記・童謡 第一集』

